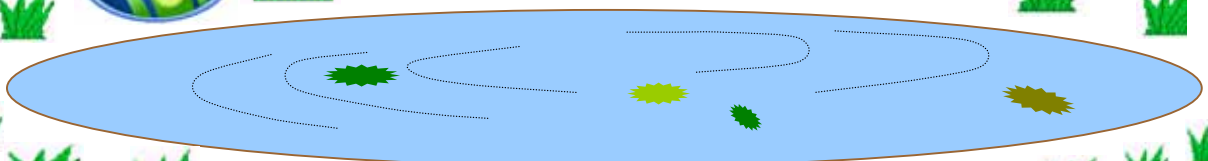


やちすこしのことがわかる本



ところどころに、わけ
わかんない石碑があるけど
いったい、なんなんだろう？

谷地は田の中ホテルの都



谷地のことを伝える会発行

目 次

1、石 碑

十 二 様 (じゅうにさま)

二十三夜様 (おさんやさま)

2、お 堂

虚 空 蔵 様 (こくぞうさま)

3、その他のこと

十 二 講 (じゅうにこう)

秋 葉 様 (あきばさま)

蟹 の 巢 (がにのす)

蛍 の 郷 (ほたるのさと)

古老のつぶやき

あとがき

1、石碑

十二様(じゅうにさま)



谷地の西方十二山の頂上に石造りの小祠(貞亨三年建立)が祀られている。十二様は安産の神と言われ、子供がお参りすると喜ぶとの言い伝えがある。かつては、祭り(十二講)の当日、町内中の子供が山に登ってお参りした。子供達は、山に登る時に馬スイカンボの葉を持っていき、この葉の上にご供物(小豆飯)をいただくのが楽しみだった。(昭和初期まで)

現在では、全戸の世帯主が参加し、梵天を上げてお祭りを行っている。

昔、山は生活資源の貴重な宝庫だった。薪をとって火をおこし、落ち葉を拾って堆肥にしていた。だから、山に入る時は誰もが必ず十二様を拜んで(安全祈願と感謝の気持)山に入っていたという。

二十三夜様 (おさんやさま)



(写真の左側が二十三夜様、右側は庚申様)

十二山の登り口に、文化九年六月建立の月侍塔(二十三夜得大勢至菩薩)が祀られてある。その北側には、かつて境内として造られたであろう10坪ほどの平地がある。例祭は毎年4月13日で、町内の役員が世話をした。宿は大きな農家が順番で受け持ち世話人が各戸から集めた米で、紅白の申し餅を作る。祭りの当日は、尼僧を招き集まった町内の人達や各地からの信者と共に線香をあげ次々に礼拝する。境内には紅白の幕が張られ、参拝者には紅白の餅等が施される。また珍しいことに、このお三夜様は眼病に御利益があるとのことで、平癒祈願をした信者が「願果たし」に小さい幟を奉納する姿がよく見られたという。

このような例祭も、昭和19年頃から中断した。

例祭...二十三夜講といい、月齢が二十三日の夜、宿に集まり月の出を待ちながら授産・安産・除難等を願う習わしのこと。

2、お堂

虚空蔵様（こくぞうさま）



虚空蔵様への石段



虚空蔵菩薩は、福德・知恵の仏として信じられ当地では特に子供の無病息災と一生に一度の大事な願い事は必ず叶えられるとして、庶民の信仰が厚く例祭日には多くの参拝者で賑わった。

虚空蔵様の開基については不詳であるが、境内には寛永八年(1631)の石碑その他供養塔や信者から寄進された立派な石造りの手洗鉢等がある。祭礼についての古い資料はないが、堂内には百万遍念仏の数珠が昭和初期頃まで置いてあった。このことは、縁日や盆等には大勢の人々が念仏を唱えながらこの百万遍の数珠回しに参加していたことがうかがえる。古老の話によれば、江戸期に一人の尼僧が住んでおり近隣の仏事等の世話をしていた。その後、明治・大正期頃には修験僧(村人からは千願寺さまと呼ばれていた)が住んでいて、祭礼日等には火渡りをしていたそうだ。

また、その頃お祭りの日に境内で地芝居が行なわれていたが、その後、次第に客が多くな

り、境内では狭いので奥泉辻五郎(奥泉始)宅の座敷で芝居を行い観客は庭で見ていたそうである。

尚、1月13日の例祭日は谷地の年始日でもあり、沿道には露天商が並び日用品等なんでも買うことができたそうである。現在、例祭は1月13日と9月13日で、当日は僧を招き読経供養が行なわれ町内の人や信者が参拝に来る。参拝者には、お札とお供物が施される。(行幸田百年の歩みより)

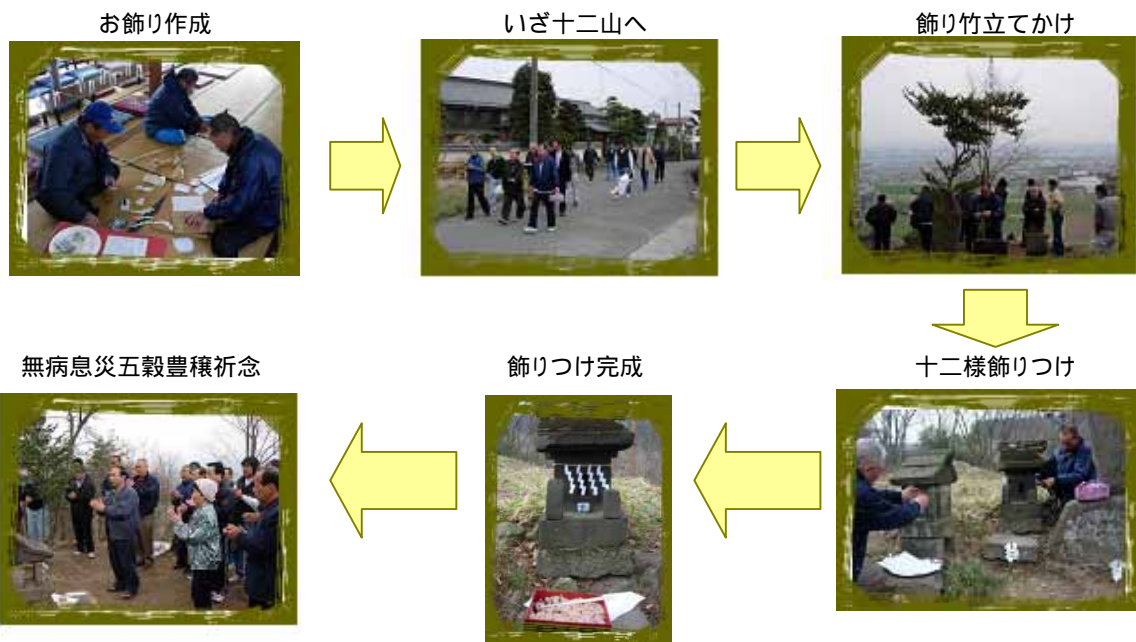
石段登り口には、戦前まで5m四方の池があったらしい。

面白い話…境内の山には狸がいて、石段の精進場にやってきてはシッポで水をかきまわし
浮き上がった魚をつかまえていたそうである。また、ある時はでかい腹を抱えこ
むようにして石段をころげ落ちて遊んでいたそうだ。

3、その他のこと

十二講（じゅうにこう）

かつては毎年4月12日にお祭りをしていたが、現在は12日に一番近い日曜日に行っている。梵天(わらの束)に御幣(三角の半紙)やおんべろ(半紙の神飾り)を飾りつけ、長い竹の先端に取り付けて、十二様のそばにある松の木に立てかけている。



秋葉様（あきばさま）

秋葉様は火伏せの神様(雷電神社の一番北にある石塔)です。例年12月17日に公会堂で秋葉様を拝み火災など町内の安全祈願を行っています。翌日からは町民が回り番で火の用心の夜警をしています。

いつ頃から続けられている行事(夜警)か分かりませんが、他町内は中断してしまいました。谷地の町民として誇りを持って良い伝統行事と言えるでしょう。

火の用心！
マッチ一本火事
のもと～



蟹の巣（がにのす）



やちは綺麗な水が豊富だったことから、町内のあちこちに蟹がたくさん生息していました。そのせいで、町内の子供たちはよその町内の子供から「谷地の谷地のガニノス」と、よくからかわれていたそうです。

現在のガニノス会の名称は、ここから付いたものです。

蛍の郷（ほたるのさと）



ホタルは、綺麗な水と緩やかに流れる小川、そして主食であるカワニナのいるのどかな田舎に多く生息します。谷地は、ホタルにとって絶好の環境だったと言えるでしょう。

今でこそ、それほど数は多くありませんが、1970年頃までは谷地中ほたるが乱舞していました、家の中にホタルが舞い込んでくるのは当たり前で、子供たちは蚊帳にホタルを招き入れて明かりを楽しみながら就寝していました。

古老のつばやき

先人は、ここを墳墓の地と定め、360年以上の年輪を重ねております。(古文書に記述あり)

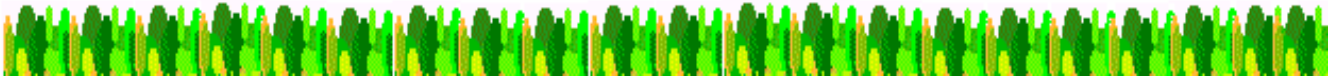
谷地は、昭和の混乱期まではわずか15軒でした。力を合わせ農業を生業として過ごして参りました。子供は、地域で大切に育てられました。

そして、今日80戸になろうとしている谷地。この地を生活の拠点に選んだ皆さんに伝統の素晴らしさ、力を寄せ合うことの素晴らしさを語り合っ欲しいと思います。

12月秋葉さま、正月道祖神に始まり地域のしきたりと伝統を会得しました。やって良い事悪いこと、人に迷惑かけないこと、地域は自ら守る、まさに秋葉さまのヤバンはそれでした。

今だからこそ集団登校しておりますが、その昔も遊びん家に集まり登校いたしました。子供の行動や遊びで、山を知り川を知り近所を知ることが出来ます。成長して故郷の良さ懐かしさ郷愁を覚えるのです。

自分の故郷を誇れる。自分の故郷が心の拠りどころになれる。そんな故郷を、そんな古里を子供たちのために創るには…。



あとがき

素朴で昔ながらの情緒が残るこの村も、時代の流れとともに少しずつ新しい町に変わりつつあります。平成18年1月1日の総会で、新しく町民になられる方のために『谷地のことが分かるような本』を作ろうと決まり、選ばれた委員で6回の会議をおこないました。たくさんの昔話に花が咲き取り留めの無い話に時間が経つのも忘れるほどでした。

ここにまとめたのは「少なくとも、これだけは谷地に住む人や子供たちに知ってほしい!」と願うものばかりです。委員会で出てきたたくさんの話のほんの一部にしか過ぎませんが、皆さんが少しでも早くこの地域に親しんでいただくための一助になれば、こんなにうれしいことはありません。

平成18年12月吉日

谷地のことを伝える会一同